

わが愛しの小型マシン

Part.1

小型マシンの変遷——ポータブル PCから謎パ〜、最新PDAまで

●波多 利朗

可搬型パソコンとして1981年に発売されたポータブルPC「Osborne 1」を嚆矢としてラップトップコンピュータの時代が続くが、1989年に入って東芝DynaBook J-3100などのノートPCが登場する。それとほぼ時期を同じくしてサブノートPCが次々と市場をにぎわすことになる。

この小型・軽量化はさらに進み、HP95 LXに代表される“掌に乗るパソコン”——パームトップPCが出現し、その一方でPDA(Personal Digital Assistants)というカテゴリを生み出していく。

こうして現在では百花繚乱の様相を呈している小型マシンだが、本稿ではその歴史を辿るとともに「状況に応じて使い分ける」という達人、波多利朗氏の「遊び方」も伝授していただく。

第1章——PDA 誕生までの過程

《1981～1982年》

常時携帯するのはムリ……

「大きくて重い」ポータブルマシン

パームトップパソコンが登場する以前にも、携帯可能なマシンは開発されてきた。可搬型パソコンとしてはじめて登場した製品は、1981年4月に発売されたOsborne 1ポータブルコンピュータだといわれている。

このマシンは、8ビットのCPUを使用

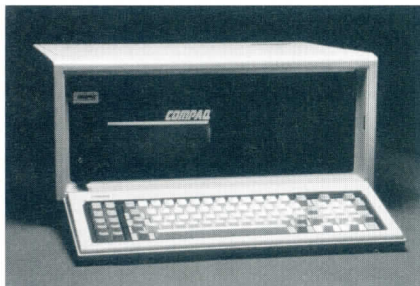


写真1 Compaq PC

しており、OSとしてCP/Mを採用している。また、WordStarやdBASE IIといったソフトウェアもバンドルされていた。

形状は、持ち運びを考慮した一体型で、ボックスタイプのケースに、5インチのモノクロCRT、5.25インチのフロッピーディスクドライブ2基およびキーボードを収納していた。

その後、1983年2月には、OsborneコンピュータのクローンマシンであるKayPro IIが登場する。

1982年11月には、Compaqから最初のIBM The PCコンパチブルのポータブルマシン、Compaq PCが登場する(写真1)。

このマシンは、CPUに8088を使用した16ビットパソコンで、OSもIBM The PCと同様、PC-DOSを採用していた。これはIBM PC用のソフトウェアが動作するということであり、結果としてCompaq PCはOsborne 1を駆逐することになる。

1981年のIBM The PC発売直後に、早くもIBMコンパチブルのポータブルパソコンが出現していたということは興味深い。それだけ「携帯できるマシン」への要望が強かったのだろう。ただし、こうしたポータブルタイプのマシンは依然として大きくかつ重かったため、常時携帯するというよりは、「持ち運べないことはないマシン」といった感が強い。

《1983～1986年》

ラップトップコンピュータの別名は“ラップクラッシャー”コンピュータ

このボックスタイプのポータブルコンピュータの大きさと重量を改善したのが、ラップトップコンピュータである。

ラップトップコンピュータ(Laptop Computer)とは、ご存知のとおり「Lap(ひざ)のTop(上)に乗せて使うことができる



写真2 NEC PC-98LT

大きさのコンピュータ」という意味である。

ラップトップマシンの先駆ともいえる製品は、1983年6月に発売されたGRiD SystemのCompassである。最初に登場したIBM PCフルコンパチ仕様のラップトップパソコンは、1984年9月に発売されたData General社のData General Oneである。

1986年3月には、IBMが初のラップトップパソコン、IBM Convertibleを発売している。日本では、1985年に富士通からラップトップマシンの先駆となるFM16 π が発売された。翌86年には、東芝からJ-3100B11が、またNECからPC-98LTが発売され、ラップトップブームが到来する(写真2)。

ラップトップコンピュータでは、非常に重かったCRTに代わり、液晶ディスプレイやプラズマディスプレイなどの軽量な表示デバイスを採用することで、「持ち運んで使用することが可能なパソコン」を実現している。

しかし、軽量とはいえ、常時携帯するには重すぎる。最も軽量なPC-98LTの重量は3.8kgだったが、6kg以上の製品が大半を占めており、ひざの上に置いて使用するにはあまりにも重く、口の悪いユーザーからは、ラップクラッシャーコンピュータ(Lap Crasher Computer: ひざを破壊するコンピュータ)などとも呼ばれた。

《1989年》

先駆的なノートパソコンは東芝DynaBook J-3100SS 001

ラップトップコンピュータは、どちらかというと「持ち運ぶことも可能なデスクトップパソコン」といった色彩が強かった



写真3 東芝 Dynabook J-3100SS 001



写真5 IBM ThinkPad 220

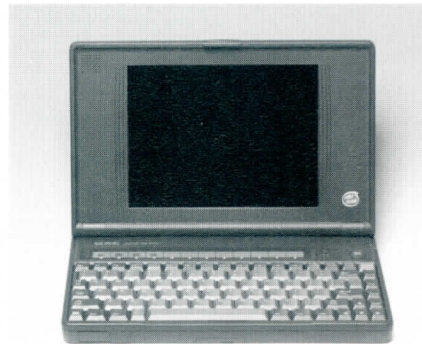


写真7 HP OmniBook 600C



写真4 NEC PC-9801N



写真6 ABC Computer BICOM SL60



写真8 東芝 Libretto 20

が、これを改良し、より小さく軽量化したノートブックパソコン(ノートパソコン)が登場する。

ノートパソコンとして先駆的な製品は、1989年に登場した東芝の Dynabook J-3100SS 001 であろう(写真3)。このマシンはA4ファイルサイズの大きさで、重量も2.7kgと軽量化が図られている。価格も20万円以下に抑えられたため、ヒット商品となった。同年11月、NECからも初のノートパソコン、PC-9801Nが出荷されている(写真4)。

その後、現在に至るまでノートパソコンは多数発売され、CPU性能やメモリ容量、HDD容量などが徐々に強化されていく。

《1988～1993年》

携帯性に優れたサブノート、そして1kg弱のミニノートへ

ノートパソコンの出現とほぼ時期を同じくして、サブノートパソコンが登場している。

サブノートパソコンはB5判程度の大きさが一般的であり、フロッピーディスクドライブやCD-ROMドライブなどの周辺機器は、すべて外付けで対応する構成が採られている。そのため、重量的には1.5～2kg程度と、ノートパソコンよりもさらに軽量

であり、常時持ち運んでも苦にならない軽さを実現している。

サブノートパソコンの最初の製品は、1988年11月に米NECが発売したUltra Liteだといわれている。

国内では、日本IBMが1993年5月に発売したThinkPad 220が名高い(写真5)。NECからは、PC-9800シリーズの一環として、1990年10月に、PC-98HA(HANDY 98)が登場する(詳しくは後述)。

筆者は、サブノートパソコンが出始めた頃に、香港ABC Computer社のBICOM SL60という製品を日本語化して使用していた(写真6)。この製品は、PCMCIAカードスロットが搭載されておらず、液晶画面解像度もダブルスキャンCGA(DCGA)だったが、CPUが80386SL(25MHz)で、当時としてはそこそこの速さを実現していたため、DOSベースで使用するにはなかなか快適な製品だった。

その後、HP社のOmniBook 600Cに乗り換えることになる(写真7)。これは、CPUに80486DX4(75MHz)を採用したサブノートパソコンで、キーボードの打ちやすさでは傑出していた。ポップアップ・マウスの

アイデアもよく、総合的に判断して非常に使いやすいサブノートだった。

サブノートパソコンよりも携帯性を重視し、より小型化した製品が、ミニノートパソコンである。ミニノートパソコンという呼称は、比較的最近になって使われはじめたもので、本体重量が800g～1kg程度の製品を指すことが多い。

ミニノートパソコンの代表的な製品としては、東芝が1996年6月に発売したLibretto 20が挙げられる(写真8)。当時、このサイズでWindows 95が動作する環境は他になく、非常に話題となった機種である。

ミニノートパソコンは、サブノートパソコンよりも、操作性を若干犠牲にすることによって小型化を実現している製品が多い。

《1989年～現在》

HP-LXシリーズやWindows CE搭載機など浸透するパームトップPC

ミニノートパソコンよりもさらに小型化を図ったものが、パームトップパソコンである。これはその名のとおり、「Palm(ての

ひらのTop(上)に乗る程度の大きさのコンピュータ」という意味である。

パームトップパソコンは、小型化とバッテリーの持続時間を重視して設計されているため、仕様の的に割り切った製品が多い。とくに、キーピッチの幅や液晶画面のサイズなどが、かなり小さくなっている。しかし、本体は徹底的に小型化されており、常時持ち運んでも苦にならない。

また、サブノートパソコンやミニノートパソコンと異なり、最高速、最新鋭のCPUを搭載した製品は少ない。どちらかといえば、ひと昔前のCPUを使用して、コスト低減とバッテリーの持続時間を重視した構成を採っている。

パームトップパソコンとして広く市場に受け入れられた最初の製品は、米国ATARI社が1989年に発売した、Portfolioだろう(写真9)。



写真9 ATARI Portfolio



写真10 HP95LX



写真11 NEC Mobile Gear II MC-R500

1991年5月に発売されたHP95LXは、英語版しかリリースされなかったにもかかわらず、日本語でメモを取ることが可能なフリーソフト「JMemo」が登場したおかげで、日本でも知名度の高いパームトップパソコンとなった(写真10)。

その後、NECのWindows CE2.0搭載パームトップ、Mobile Gear II MC-R500の登場に至るまで(写真11)、数多くのパームトップパソコンが市場に投入されている。

デスクトップマシンとの互換性を考慮して小型化された製品がパームトップパソコンだとすれば、他機種との互換性は低いものの、用途に特化して小型化されたのがPDAだといえよう。

最初に登場したPDAは、SHARPが1988年9月にアメリカで発売したWizardだといわれている。その後、1990年9月には英国製のPDA、Psion 1が登場している。日本では、1993年10月にSHARPがペン入力型PDA、ZAURUS PI-3000を発売し、ビジネスマンを対象に浸透していった。

第2章——時代を画した名機

《1989～1990年》

パームトップパソコンの“原器” Poqet PCが登場

では、パームトップパソコンおよびPDAの変遷を見てみよう。とはいえ、ここでは主に筆者が使用したマシンを取り上げており、すべての製品を網羅しているわけではないので、ご了承願いたい。

また、いわゆる謎PDA機と称されるマシンには、発売時期が不明なものも多く、そのような機種については、およその発売年を記している(年表に関しても同様)。

● ATARI Portfolio

パームトップパソコンとして市場にはじめて受け入れられた製品は、前述したとおり、1989年にATARIが発売したPortfolioである。ただしこの製品は、英国DIP社が開発したものをATARIにOEM供給したものだ。

ATARI Portfolioは、CPUに80C88Aを使用し、IBM PC互換アーキテクチャーを採用している。内蔵されているOSもMS-DOSと互換性のあるDIP社の「DIP Oper-

ating System Ver.2.11」を搭載していた。ただし、液晶画面の仕様が独自のもののなので、IBM PC用ソフトウェアがそのまま動作するというわけではない。

このように、現在のマシンの仕様から見るとかなり特殊な構成だが、初の実用的なパームトップパソコンとして、ヨーロッパを中心に広く受け入れられた。

ジェームズ・キャメロン監督のSF映画「ターミネーター2」では、このATARI Portfolioが、銀行のキャッシュディスプレイをハックする場面で用いられており、なかなか凝った演出だった。

● Poqet PC

同じく1989年には、Poqet Computer Corporationから、Poqet PCが発売される(写真12)。これは、CPUに80C88(7MHz)を使用したIBM PC/XT互換マシンである。

タッチタイプが可能なキーボードや、CGAの液晶画面、PCMCIA Type I スロットの採用など、現在のパームトップパソコンの基本的な仕様を盛り込んだ、パームトップパソコンの原器ともいえる製品である。

Poqet Computer Corporationは、その後Fujitsu Personal Systemに買収され、Poqet PCのノウハウは、富士通のOASYS pocketに継承されることになる。



写真12 Poqet PC



写真13 NEC PC-98HA(HANDY 98)

● NEC PC-98HA(HANDY 98)

1990年10月、NECからPC-98HA(HANDY 98)が発売される(写真13)。19万8000円のこのパソコンは、パームトップというよりは、ミニノートもしくはサブノートに近い大きさである。

PC-98HAは、CPUにV50(10MHz)を使用し、640KBのメモリを内蔵していた。液晶画面は、NEC系のパソコン仕様を踏襲しており、640×400ドットのモノクロ画面である。キーボードはボタンタイプを採用しており、本体重量は1.1kgである。なお、OSはMS-DOS Ver.3.1をROMで内蔵している。

《1991年》

HP95LXが発売され Psion Series 3もお目見え

●富士通 OASYS pocket

1991年3月、前述のPoqet PCの技術を使用して、富士通からOASYS pocketが発売される。重量が530g、価格が12万8000円というこの小型ワープロは、発売後2ヵ月で1万5000台の販売を達成している。

本シリーズはその後バージョンアップが行われ、1992年5月にOASYS pocket2が9万9800円でリリースされ、1994年5月にはOASYS pocket3が同じ価格で発売されている。このOASYS pocket3にはMS-DOSが搭載され、DOSマシンとしても用いることができた。

●HP95LX

1991年5月には、記念すべきパームトップパソコン、HP95LXが発売される。

HP95LXは、CPUにV20H(5.37MHz)を使用したIBM PC/XT互換のマシンである。PCMCIA Type I カードスロットを1基内蔵しており、MDA(Monochrome Display Adapter: IBM PCに採用された表示方式)コンパチブルの液晶画面を搭載し、OSにはMS-DOS Ver.3.22を使用している。

このマシンは、英語版であるにもかかわらず、日本語でメモを取ることが可能なフリーソフト「Jmemo」の登場により、日本でも非常に話題となった。

●SHARP PC-3000

同じく1991年には、SHARPからPC-3000



写真14 SHARP PC-3000

が発売される(写真14)。このマシンが世に出るまでには、以下に述べるような経緯が見られた。

当時、ATARI Portfolioに関しては、RAM容量が少ない、LCD画面が小さい、バッテリー残量がわずかになるとデータが消えるなどといったさまざまな問題点が指摘されていた。これらを改良すべく、DIP社はPortfolioの後継機種としてPortfolio 2を開発した。

しかし、ATARIはこのPortfolio 2を次期製品として採用しなかった。その代わりに、SHARPがPortfolio 2のライセンスを買い取り、PC-3000として製品化したのである。

PC-3000は、PCMCIA Type I (Type II カードも使用可能だが、マニュアルにはType I と記載されている)カードスロットを2基搭載し、CPUに80C88A(10MHz)を使用した、IBM PC互換アーキテクチャーのマシンである。OSにはMS-DOS Ver.3.3を採用している(ROMに内蔵)。

この製品は、見やすいCGA液晶ディスプレイと、タッチタイプが可能なキーボードを備えた、品質の高いマシンだが、日本語化されなかったため、残念ながら国内での知名度は低かった。

●Psion Series 3

またこの年には、“大英帝国のPDA” Psion Series 3が発売される(写真15)。これは、CPUにV30H(3.84MHz)を使用したマシンである。OSはEPOC-OSと呼ばれる独自仕様のものを採用していた。

このOSは、SIBO(Single Board Organizer)アーキテクチャーに基づいて設計された、ブリエンプティブなマルチタスクOSで、そのファイルシステムは「8文字+3文字」の命名規約に従うなど、表面上はMS-DOSに類似したものになっている。なお、



写真15 Psion Series 3



写真16 Psion Series 3a

EPOCの名称は、「(新)時代」を意味する“epoch”に由来している。

Psion Series 3は、その後の1993年9月にバージョンアップされ、Psion Series 3aとなる(写真16)。CPUはSeries 3と同じだが、液晶ディスプレイの解像度が向上し、内蔵RAM容量が増大している。

このSeries 3aはさらにモデルチェンジされ、1996年9月にSeries 3cとなる。Series 3cでは、CPUのクロックスピードが7.68MHzに上げられ、米国仕様の製品には液晶ディスプレイにバックライトが搭載されるなど、細かい改良が施されている。

●Prolinear PS-1000

ProlinearのPS-1000が登場したのも1991年である。本機はCPUにV30(7.16MHz)を使用したもので、OEM供給されたことから、国内でもブランド名称は数種類に及び、秋葉原のショップで販売された。

このマシンはCGA画面を搭載しており、Type IのPCMCIAカードスロットを2基実装していた。後に発売される謎パーム機の代表機種、ME-386(後述)とほぼ同じ大きさであり、タッチタイピングが可能なキーボードを備えていた。

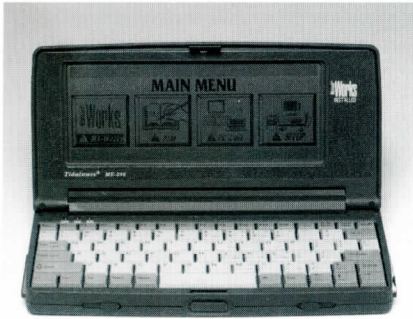


写真17 Tidalwave ME-386

《1992～1994年》

台湾製のME-386など
謎パー機が続々と出現!

● Tidalwave ME-386

1992年頃には、台湾Tidalwave社のパームトップ機、ME-386が登場する(写真17)。ME-386は、秋葉原のショップでも販売されたため、謎パー機のなかではメジャーな存在となった。

CPUに80386SXLV(25MHz)を使用し、2基のPCMCIA Type II スロットを左右に配置した本機は、IBM PCとの互換性も高く、話題を集めた。

このマシンは、Mini Note とか Palm Book、PS-3000などの製品名称を持ち、各社からOEM販売されている。違いはLCDの化粧パネルのロゴ表示程度で、基本的な内部構造は同じである。こうした点も、謎パー機と呼ばれる所以である。

●モノリス

1992年秋のデータショーでは、IBM製パームトップパソコンの試作機、モノリスが発表された。この重量500gのマシンは、1995年10月に発売されるPalm Top PC110のパイロットモデルである。

●HP100LX

1993年5月には、HP95LXの後継機種、HP100LXが発売される(写真18)。

HP95LXでは、液晶画面がMDA互換だったため、CGA画面を対象としたIBM PC用ソフトウェアの多くが動作しなかった。これに対して、HP100LXでは液晶画面に640×200ドットのCGA画面を採用しており、グラフィックス表示に互換性が確保されたことから、市販されているIBM



写真18 HP100LX

PC互換機用のソフトウェアが動作するようになっている。

CPUには80C186(7.91MHz)が採用され、PCカードスロットがPCMCIA Ver.2.0準拠となったため、メモ리카ード以外にもモデムカードをはじめとするさまざまなPCカードが使用できるようになった。

また、内蔵のPIMが大幅に機能強化され、システムマネージャと呼ばれる内蔵プログラム管理OS上で、さまざまなアプリケーションソフトがGUI感覚で使用できるようになっている。オカヤシステムウェアからは日本語化キットも発売され、HP100LXは日本でもメジャーな地位を獲得している。

● Apple Newton MessagePad

1993年8月、Appleは初代 Newton MessagePadを発売する。このマシンはオ



写真19 Apple Newton MessagePad 130

リジナルメッセージパッドと呼ばれており、その後に登場する製品と区別される場合が多い。

1994年3月にはMessagePad 110が登場し、その後1995年1月には120が、また1996年4月には130が発売されている(写真19)。

最新の製品は、MessagePad 2100だが、このマシンはCPUにStrongARM110(161.9MHz)を使用し、PCMCIA Type II スロット2基と5MBの内蔵RAMを実装している。

● OMRON Massif

1993年、OMRONはB5サイズの携帯端末、Massifを発売する。このマシンは、Chips&Technologies製の16ビットCPU、F8680A(8MHz)を使用し、画面解像度は640×400ドットのDCGAを採用していた。

単三乾電池4本で8時間の駆動が可能で、重量は880gである。9600/2400bpsのFAXモデムを内蔵しており、発売価格は9万9800円である。このMassifは、1995年8月にMassif IIとしてバージョンアップされている。

● Lexicomp LC-8620

1993年には、いわゆる「謎パー機」の代表的な製品もいくつか登場している。

HP製の1.3インチ40MB HDD、Kitty hawkを搭載した異色のパームトップ機である、台湾Lexicomp社のLC-8620は、1993年末頃から市場に出現した(写真20)。

当時はストレージデバイスとしてのフラッシュメモ리카ードがまだ高価であり、パームトップ機のような小型マシンに大容量のメモリを安価に搭載するためには、HDDが適していたのである。



写真20 Lexicomp LC-8620

このマシンは、HDDを搭載したパームトップ機という点でもユニークな存在だったが、CPUにChips&Technologies製の16ビットCPU、F8680A(7/14MHz)を使用している点でもアドバンテージを持っている。というのも、F8680AはIntelの8086互換CPUだが、処理速度は80286相当の実力を持っていたからだ。

その反面、CPUが特殊なことから、フリーソフトによる日本語化には時間がかかった製品でもある。

1994年開催のCOMDEX/Fallでは、このマシンに中国語版や韓国語版Windows 3.0をインストールしたデモが見られたものだ。また、Moving Pocketなどの名称で国内のショップでも発売されたので、目にされた方もおられるだろう。

● Instant Tech PTV-30

1993年には香港のGroup Sense Limitedから、Instant TechブランドでPTV-30が発売される(写真21)。

Group Sense Limitedは、パームトップパソコンを得意とする企業のように、このPTV-30のほかにも、携帯性に優れたPTP-20といった製品も発売している(写真22)。

PTV-30は、CPUにV30(7.16MHz)を使用した、きわめてオーソドックスなつくりの

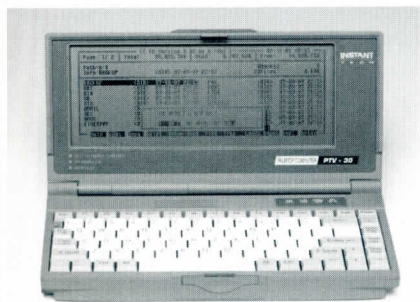


写真21 Instant Tech PTV-30



写真22 Instant Tech PTP-20

製品である。動作速度はあまり高速ではなかったが、IBM PCとの互換性は高く、またPCMCIAスロットも2基実装されていたため、拡張性にも優れていた。フリーソフトウェアによる日本語化も容易で、扱いやすいマシンである。

PTV-30の兄弟機種であるPTP-20も、この頃に登場している。このマシンはPTV-30と性格を異にしており、HPのパームトップを意識したデザインを採用している。PTV-30が携帯性よりも拡張性を重視したのに対して、PTP-20は小型・軽量をめざした機種である。CPUにV20(14MHz)を採用していたこともあり、PTV-30よりも動作は高速だったが、日本でもそこそこの知名度を得たPTV-30に比べて、PTP-20は無名のままに終わった。

● SHARP ZAURUS PI-3000

1993年10月、SHARPの携帯情報端末、ZAURUS PI-3000が発売された。その後1994年5月には、PI-4000が発売される。

● HP200LX

1994年11月、HP200LXが発売される(写真23)。基本的な構成はHP100LXと同等だが、搭載ROM容量が増大し、内蔵アプリケーションソフトも強化された。

HP200LXは現在に至るまで、日本の代表的なパームトップパソコンとして多くのユーザーの支持を集めている。

*

なお、本誌1994年12月号には、特集「謎のパームトップ機日本語化計画」が掲載されている。この特集は、当時あまり知られていなかったパームトップ機に焦点を当てたもので、その仕様と日本語化の方法について解説している。「謎パーム機」という造語



写真23 HP 200LX

も、この記事から誕生している。登場したパームトップ機は以下のとおりである。

- ・ PTV-30
- ・ PS-1000
- ・ PS-3000
- ・ ME-386
- ・ Moving Pocket
- ・ Psion Series 3a
- ・ CARD WIZZ

《1995年～現在》

PalmPilotが爆発的人気を集め Libretto、Psionが追撃へ

● NEC VT-1

1995年8月、NECは携帯電子メール端末、VT-1を社内限定で発売する(写真24)。

この端末は、2400bpsの内蔵モデムと640×200ドットのモノクロSTN液晶画面、タッチタイピングが可能なキーボードを搭載したものである。後に発売されるキーボード版Mobile Gearのパイロットモデル的存在といえよう。

外観は、Tidalwave社のパームトップパソコン、ME-386とよく似た構成だが、PCMCIAカードスロットは1基のみの搭載となっている。後述するようにMobile

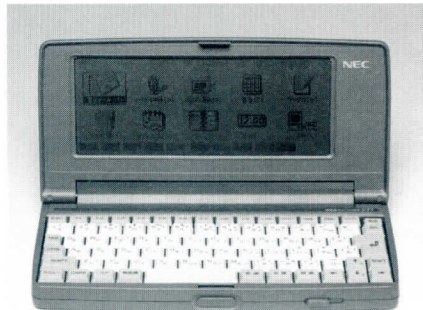


写真24 NEC VT-1



写真25 IBM Palm Top PC110

Gearは単三乾電池2本で駆動するが、VT-1は単三乾電池4本を必要としていた。

● IBM Palm Top PC110

1995年10月、日本IBMはPalm Top PC110を発売する(写真25)。この製品はA6ファインサイズのきわめてコンパクトなボディを持ち、CPUに80486SX(33MHz)、そしてVGAのカラー液晶画面を搭載している。

それまでのパームトップ機がCGAモノクロ液晶を使用していたのに対して、Palm Top PC110は256色のVGAカラー液晶を使用していたため、多くのDOS/V用ソフトウェアがそのまま動作し、きわめて汎用性の高いマシンとなっている。

PCMCIA Type II スロット×2 (Type III×1)を搭載しており、拡張性も高い。音源も内蔵されており、携帯ゲームマシンとして活用(?)した人も多いはずだ。

内蔵モデムのスピードが遅いことや、キーボードが押しにくいという点が指摘されているものの、高速なパームトップ機として現在もおロングセラーを続けており、熱狂的なマニアも多い。

● US Robotics Pilot1000/5000

1996年1月、US RoboticsからPilot1000/5000が発表される。この製品は発売と同時にベストセラーPDAとなったが、その後、PalmPilot(写真26)、Palm IIIと名称が変わり、現在では3Comから発売されている。



写真26 US Robotics PalmPilot

る。Pilotシリーズが成功した要因としては、ワイシャツの胸ポケットに収まるサイズと、160gという軽量が挙げられるだろう。また、パソコンとの接続の容易さ、内蔵PIMソフトのレベルの高さなども見逃せない。

発売当初より、フリーソフトによる日本語化が図られたため、国内市場でもヒットしたことは記憶に新しい。

● NEC Mobile Gear

1996年4月、NECはMobile Gear初代機を発売する。キーボードタイプのMC-K1は、先に社内限定発売していた携帯端末VT-1をベースに高機能化を図った製品である。CPUには486SX相当品(16MHz)を使用しており、単三乾電池2本で駆動する。VT-1では640×200ドットだった液晶画面がひと回り大きくなり、640×240ドットとなっている。

Mobile Gearは、IBM PC/AT互換アーキテクチャーを採用しており、MS-DOS Ver.6.2が搭載されていた。また、携帯端末であるにもかかわらず、タッチタイピングが可能なQWERTY82キー・キーボードを装備しており、高速なテキスト入力が可能となっている。

● 東芝 Libretto 20

1996年6月、東芝はLibretto 20を発売する。前述したとおり、この種の小型マシンとしては初めてWindows 95を搭載した製品であり、ミニノートという新しいジャンルを形成したことで知られる。

CPUにAMDのAm486DX4(75MHz)を搭載し、ストレージデバイスとして8.45mm厚の270MB HDDを実装している。このマシンは、その後30、50、60、70、100とスペックが向上してきている。スペック的に非常に強力だったため、LinuxやFreeBSDといったフリーのUNIX環境を構築して楽しむマニアも多かった。

Libretto 20が好評を博したことから、同年11月には早くもCPUとHDDスペックを強化したLibretto 30が発売されている。

● Psion Series 3c/Siena

1996年9月、PsionからSeries 3cとSiena



写真27 Psion Siena

が発売される(写真27)。Series 3cは、すでに発売されていたSeries 3aのマイナーチェンジ版であり、CPUのクロックアップなどが施された。Sienaは、Series 3a/3cの廉価版として位置付けられている。

● CASIO Cassiopeia A-11

1996年秋に開催されたCOMDEX/Fallでは、各社からいっせいにWindows CE端末が発表され、モバイルブームが到来する。

1996年末、米CASIOからCassiopeia A-11(英語版)が発売され、日本にも輸入された(写真28)。

このマシンは、CPUに32ビットRISCプロセッサSH-3(40MHz)を採用し、480×240ドットの液晶画面を搭載している。MS-DOSに代わる新しいOSが採用されたことで、非常に話題となった製品である。

● 富士通 INTER Top

1997年6月には、富士通から携帯端末INTER Topが発売されたが、このマシンはMS-DOSを使用したPC/AT互換機である。

OSにWindows CEを採用した端末が相



写真28 CASIO Cassiopeia A-11



写真29 NEC Mobile Gear MC-CS12

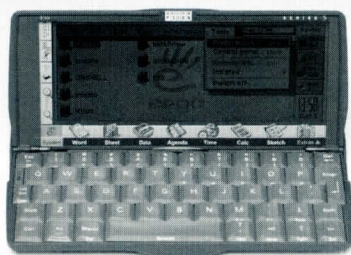


写真30 Psion Series 5



写真31 Geofox-One

次いで発売されるなか、MS-DOSを使用したコンベンショナルな仕様のマシンが登場したことになる。

● Psion Series 5 と Geofox-One

1997年7月、最初の日本語Windows CEマシンとしてCassiopeia A-51が発売されたが、続いて1997年9月には、NECよりWindows CE 1.0版 Mobile Gear MC-CS12が発売される(写真29)。

また、1997年秋のCOMDEX/Fallでは、Psion Series 5のコンパチマシンであるGeofox-Oneが発売される(写真30、31)。

このマシンは、Psion Series 5で搭載されていた、EPOC 32と互換性を保ちつつ、Series 5の弱点だったネットワーク機能を強化しており、とくにマニアの間では非常に話題を集めた製品である。

● NEC Mobile Gear II MC-R500

1998年3月には、Windows CE2.0を採用したMobile Gear II MC-R500が発売される。従来のWindows CEマシンで指摘されていた画面の狭さとキーボードの貧弱さ、処理速度の遅さなどが改善されている。

第3章——波多利朗の(秘)活用術

《ポイント》はT.P.O.》

マシンの特性を掴み 複数台を使い分ける

さて、小型マシンの使い方は、それぞれ十人十色だろうが、筆者の場合は常時使用するマシンといったものはなく、状況に応じて複数のマシンを使い分けている。

●海外旅行ではHP200LX

たとえば、海外旅行へはHP200LXを持参する。その理由としては、電池の保ちの良さ、そしてスイッチを押してすぐにメモを取ることができる機動性、モデムカードを使用したネットワーク接続の容易さなどが挙げられる。タッチタイピングが困難だという欠点はあるが、これは我慢するほかない。

海外旅行では、余計な荷物はなるべく持ちたくない。したがって、ACアダプタで充電するタイプのマシンは対象外となる。HP200LXでは簡単に入手できる単三乾電池を使用しており、この点でも安心できる。

●出張先ではMobile Gear MC-MK22

出張した際の議事録作成には、DOS化したMobile Gear MC-MK22を携帯する。

キーボードタイプのMobile Gearは、タッチタイピングが十分可能なキーピッチを備えており、記録文書の作成には最適である。また、DOS化して使っているのは単なる筆者の趣味であり、とくに理由はない。

●社内打ち合わせにはOmniBook 600C

社内の打ち合わせなど場所の移動が少ない場合には、HPのOmniBook 600Cを使用する。このマシンのキーボードは、下手なデスクトップパソコンのキーボードよりもはるかに打ちやすい。

HPオリジナルのポップアップマウスの出来もよく、筆者はサブノートの傑作だと思っている。しかし、電池の保ちが悪く、かなり重い。社内での打ち合わせならともかく、外出先まで持っていく気にはなれない。

なお、この用途のマシンとしては、その後フロンティア神代のRT-21(別名チャンドラ)も使用していたが、ごく最近になって、SONYのVAIO PCG-505に乗り換えた。そのサブノートらしからぬ携帯性と、お洒落なデザインに満足している。

●スケジュール管理などにはPalmPilot

スケジュール管理やアドレス帳として使う場合は、US Robotics社のPalmPilotが最適だ。

このマシンのPIM機能は非常に優れており、デスクトップ機との連携も容易である。なによりもワイシャツのポケットにすっぽりと収まるサイズが気に入っている。

ペンによるテキスト入力は若干慣れを必要とするが、スケジュールの確認や電話番号を控えておくにはもってこいの製品だ。どうしてもテキストを入力したい場合には、Newtonキーボードを使うことも可能である。

また、筆者はゲームマシンとしても使っており、通勤時の電車内で倉庫番やソリティアなどを楽しんでいる。

●ゲームにはPalm Top PC110

しかし、いままで発売された多数のDOS用ゲームを楽しむには、IBMのPalm Top PC110が最適だろう。

バッテリーの持続時間が若干短いものの、このマシンには音源も搭載されており、なんとといってもVGAのカラー液晶搭載486マシンだから、ゲームの臨場感が違う。その気になればジョイスティックを付けることも可能だ。小型マシンとはとても思えないような環境を構築できるのは、実に魅力的だ。

Apple IIのエミュレータで、ゲームを走らせている方も多いようだ。

●デザインならやっぱりSeries 5

機能だけではなくデザインも重視する方

◎国内外の小型マシンの変遷(ただし、海外マシンは本国での発売年月)

1981	・Osborne I (4月)		・Prolinear PS-1000		・NEC VT-1 (8月)
1982	・Compaq PC (11月)	1992	・富士通 OASYS pocket2 (5月)		・Omron Massif II (8月)
			・ABC Computer BICOMSL-60 (11月)		・IBM Palm Top PC110 (10月)
1983	・KayPro II (2月)		・Apple Macintosh PowerBook (11月)		・HP OmniGo100
	・GRiD System Compass (6月)		・Tidalwave ME-386	1996	・IBM ChipCard VW-200 (2月)
1984	・Data General One (9月)		・IBM モノリス (試作機)		・NEC Mobile Gear MC-K1 (4月)
		1993	・IBM ThinkPad 220 (5月)		・Apple Newton MessagePad 130 (4月)
1985	・富士通 FM16 π		・HP100LX (5月)		・US Robotics Pilot1000/5000 (5月)
			・SHARP Wizard OZ-9600 (6月)		・東芝 Libretto 20 (6月)
1986	・IBM Convertible (3月)		・Apple Newton MessagePad (8月)		・Psion Series 3c (9月)
	・東芝 J-3100B11		・Psion Series 3a (9月)		・Psion Siena (9月)
	・NEC PC-98LT		・HP OmniBook 300 (9月)		・Apple Newton MessagePad 2000 (10月)
1987			・SHARP ZAURUS PI-3000 (10月)		・CASIO Cassiopeia A-11 (11月)
			・DAUPHIN DTR-1 (11月)		・NEC Mobile Pro (11月)
1988	・SHARP Wizard (9月)		・Lexicomp LC-8620		・日立 HPC(11月)
	・米NEC UltraLite (11月)		・OMRON Massif		・東芝 Libretto 30 (11月)
		1994	・Motorola Envoy (1月)	1997	・ライオスシステム チャンドラ (1月)
1989	・NEC PC-9801N (11月)		・HP OmniBook 425 (2月)		・松下 ビノキオ ALA-P1 (3月)
	・Apple Macintosh Portable (12月)		・Compaq CONTURA AERO (2月)		・富士通 INTER Top (6月)
	・東芝 Dynabook J-3100SS 001		・GRiD System Simon (3月)		・Psion Series 5 (6月)
	・ATARI Portfolio		・Apple Newton MessagePad 100, 110 (3月)		・CASIO Cassiopeia A-51 (7月)
	・Poqet Computer Poqet PC		・富士通 OASYS pocket3 (5月)		・HP HP320LX (7月)
1990	・Psion 1 (9月)		・SHARP ZAURUS PI-4000 (5月)		・NTT ドコモ Mobile Z (7月)
	・NEC PC-98HA (10月)		・HP200LX (9月)		・NEC MobileGear MC-CS12 (9月)
			・HP OmniBook 600C (11月)		・東芝 Libretto 60 (9月)
1991	・富士通 OASYS pocket (3月)		・SONY MagicLink (11月)		・NEC mobio NX (10月)
	・HP95LX (5月)		・Instant Tech PTV-30		・Geofox-One (11月)
	・Psion Series 3		・Instant Tech PTP-20		・SONY VAIO PCG-505 (11月)
	・SHARP PC-3000	1995	・Apple Newton MessagePad 120 (1月)	1998	・NEC Mobile Gear II MC-R500 (3月)

には、やはりPsion Series 3aもしくはSeries 5をお勧めしたい。

Series 3a(またはSeries 3c)は、小型ながらも機能美を備え、簡易エディタを使用すれば日本語のメモを取ることもできる。

Series 5は、パームトップ機としては異例の大きさのキーボードを採用している。その凝ったキーボードメカは一見の価値があり、英語版しか発売されていないにもかかわらず、日本でも非常に話題を集めている。現在も日本語化の作業が行われている模様で、今後ますます期待できる製品だといえよう。

●趣味で楽しむなら DOS ベースのマシン
趣味の世界で遊ぶ端末としては、やはりMS-DOSをベースとした「謎パー機」に限る。MS-DOSの世界に馴染んだ人にとっては、見通しのよいDOS上でさまざまなソフトを使用することが可能なこの種のマシンは、格好の遊び相手になるはずである。

Poqet PC や SHARP PC-3000 で日本語環境を構築し、インターネット接続まで行うとすれば、かなりの艱難辛苦を経験することになるが、それはそれで結構面白いし、勉強にもなる。ただし、あまりハマリすぎ

ないように……。

*

常時携帯する小型マシンは、言ってみればアクセサリのようなものであり、個人の嗜好が大きく影響する。自分なりのこだわりを持って選んだマシンを存分に使い込んでいきたいものだ。

《参考文献》

『Mobile office 1995 April Vol.6, NO.4』(Cowles Business Media)

『PC WAVE 創刊号(1993年1月号)～1998年4月号』(電波実験社)

『僕らのパソコン10年史』(翔泳社)